



TITLE:

# 交霊会におけるシャーマンの実践—シンガポール華人系寺廟の文化人類学的研究( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

福浦, 厚子

---

CITATION:

福浦, 厚子. 交霊会におけるシャーマンの実践—シンガポール華人系寺廟の文化人類学的研究. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13036>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	福浦厚子
論文題目	交霊会におけるシャーマンの実践 —シンガポール華人系寺廟の文化人類学的研究		
(論文内容の要旨)			
<p>福浦厚子氏の博士学位請求論文（以下本論文）は序論（第1章）、本論（第2章～第7章）、結論（第8章）からなる。本論の章題は以下の通りである。第2章「調査寺廟の概要」、第3章「主席・道士・童乩」、第4章「問神の依頼者と依頼内容」、第5章「問神での災因論」、第6章「個人・家族・寺廟」、第7章「神聖空間のポリティクス」。また、本論文には補遺として四つの既刊報告書や論文が添付されている。それらは、補遺1「慈善活動と社会基盤」、補遺2「広東阿媽」、補遺3「女性労働と人口移動」、補遺4「華人の社会組織」である。</p> <p>本論文の目的は、シンガポールにおける華人の宗教実践である拜神<small>バイシェン</small>のなかでも、おもに童乩<small>タンキ</small>が寺廟の交霊会において行う儀礼に着目し、儀礼におけるシャーマン、つまり童乩の役割を通して国家と社会制度との関係やジェンダー規範を検討すること、とくに、公的な権力に対して周縁化されていると考えられている女性の権威が、どのような形で維持されているのかについて明らかにすることである。さらに、都市社会という特色をもつシンガポールにおいて、寺廟が果たしている役割や、英領植民地になって以来移民によって形成された社会において宗教が果たしている役割について検討している。本論文は、これまでのシンガポールについての宗教研究においては、都市社会、多文化社会、移民社会といった同国の特徴的な状況を考慮してこなかったという問題意識に基づき、交霊会における依頼者や童乩の個人像や、拜神と地域との関係、交霊会での童乩と依頼者とのやり取りなどを分析している。</p> <p>序論では、上記の目的や理論的視座が述べられ、さらに先行研究が検討されている。</p> <p>第2章では、本書の主たる調査地となったシンガポール、とくに調査対象となったA寺廟の概略、歴史、拜神、童乩のライフヒストリーが述べられている。</p> <p>第3章では、寺廟の活動を考察する際にもっとも重要な宗教職能者である童乩（シャーマン）と道士（司祭）、さらに寺院の管理人（経済的支援者）である主席の相互関係が、年中行事の詳細な記述を通じて明らかにされている。それによると、童乩と道士の関係は補完的である。以上が、本論文の導入部である。</p> <p>第4章と第5章では、童乩とその依頼者との相互作用や、相談内容に関わる分析がそれぞれなされている。寺廟の日常的な宗教実践である交霊会では、童乩に寺廟の超自然的存在が憑依し、依頼者からの相談に応答する。第4章ではこの交霊会でのやり取りを検討している。具体的には、575件の依頼について統計的に分析している。相談内容は男女およそ半々（男性289、女性286）についてである。内容は、病気、仕事、子ども、家庭不和などによるストレスが主である。興味深いのは、女性は自らの問題でなくても、当事者に代わって訪れていることが多いということである（全体のおよそ6割）。これについて本論文は、女性が社会において劣位に位置するゆえに、交霊会</p>			

という場における童乩の権威を借りて家庭内での地位を高めようとしていると指摘する。このような力関係の行使、母の権威の確立は、子どもとの関係でとくに顕著である。

第5章では、交霊会における災因論を考察する。250件の事例から災因とその解決法について統計的な分析を行っている。災因は大きく、本人の性格、運、祖先、体質、精神的な不安、血気不純、その他に分かれる。これらについて、薬、護符、儀礼、食事制限、行動規範の強化などの処方になされる。本論文ではとくに、当事者本人が原因とされる語りに注目し、童乩が社会秩序の維持に積極的に貢献している点を指摘する。

第6章は、より広い視野から家庭での祖先崇拝と寺廟での儀礼の分析を通じてシンガポールにおける家父長主義的な価値観の存在を明らかにする。この価値観は、国家から家庭内まで共通に見られる。そして、このような価値観を支えるのが、寺廟において「国泰民安」を願う儀礼や、祖先祭祀を命じる交霊会である。ただし、劣位の女性が宗教的な権威を積極的に引受けることで家庭内での地位を高める場合もあるし、子どもが交霊会の場で抵抗するという場合もある。

第7章では、歴史的な視点から、寺廟とともに神聖な空間である墓地をめぐる政策を取り上げる。植民地政府にとって墓地が居住地に隣接するのは、衛生上認め難いことであった。このため、墓地の撤去を求めて住民と政府との間に対立が生じる。本章後半では、こうした墓地の記憶として、また被抑圧者の語りとして幽霊譚を取り上げている。

第8章において、申請者はこれまでの考察をまとめ、今後の課題として若者たちのジェンダー・アイデンティティの構築と宗教実践との関係や、寄附行為の変化や中国本土との関係などの研究を挙げている。

補遺1では、善堂を一つの例として取り上げ、そこで行われている慈善活動や祖先祭祀などについて明らかにしている。補遺2と3では、中国からシンガポールに移動した女性たちを事例に、結婚観や就労意識、同地が彼女たちに求める役割期待について論じている。補遺4では、寺廟の歴史的な変遷を補うために、19世紀における移民たちの社会組織について検討している。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文（以下本論文）は、シンガポール華人系社会のシャーマニズムに注目し、その家父長主義的なイデオロギーと他の宗教的職能者との関係、依頼人との相互関係、社会機能などを、詳細な民族誌的資料に基づき論じている。本論文の評価すべき点は以下の3点にある。1) 対象と方法の独自性、2) シンガポール研究への貢献、3) 宗教人類学への貢献である。

1) 対象と方法の独自性

1949年以後長い間、外国人研究者が中国本土で長期のフィールドワークを実施することは不可能であった。このため中国社会に関心のある研究者は、台湾、香港、シンガポールなどで調査を行ってきた。したがって、シンガポールでの文化人類学的研究の歴史は長い。本論文の主題である華人系社会のシャーマニズムについての研究も以前からなされている。にもかかわらず、本論文には二つの新しい視点が認められる。一つは歴史的な視点である。本論文は、シンガポールが移民社会であったこと、英国による植民地支配を受けていたこと、さらに独立後の民族問題や一党独裁体制での政策など、マクロな政治経済的な文脈を背景にシンガポールの宗教実践を考察している。もう一つは、交霊会におけるシャーマン（童乩）と依頼者とのやり取りを録音し、考察するというミクロな分析視点である。これは、当事者たちの信頼を得ることではじめて可能になる方法であり、長期フィールドワークの成果として評価したい。マクロとミクロの分析視点を貫く本論文の視点は、ジェンダー分析である。家父長主義的イデオロギーが国家次元から家庭次元までを支配しているという認識に立って、それがどのような形でときに強化され、宗教実践の文脈でときに女性自身によって利用されるのかを考察している。

2) シンガポール研究への貢献

本論文を特徴づけているのは、シンガポール社会についての行き届いた考察である。それは、従来の文化人類学的分析の限界を意識した歴史的なアプローチに基づく。本論文では、主題であるシャーマニズム以外にも、土地制度、選挙制度、教育制度、宗教施設への国家政策、埋葬地・墓地政策についての考察がなされ、さらに補遺では、慈善活動、女性の移民や労働、華人の社会制度が取り上げられている。とくに第7章で論じている埋葬地・墓地をめぐる植民地政府と地域住民との対立は、従来十分に論じられてこなかった主題である。また、シンガポールで今日報告されている幽霊譚を取り上げることで、埋葬地・墓地をめぐる問題がポスト・コロニアルな主題として現代でも重要であることを明らかにしている。シンガポールについては政治や経済、住宅事情、多民族国家といった視点からすでにいくつかの研究が日本人によっても行われている。しかし、埋葬地・墓地、さらに幽霊譚といった現象に注目する研究は皆無であった。これらを対象にすることで現代のシンガポールという都市国家の性格を明らかにしようとする本論文のアプローチは、きわめて独創的なものとして評価したい。

### 3) 宗教人類学への貢献

宗教は、文化人類学における主要な研究主題である。非キリスト教の宗教儀礼や信仰、神話は、古くから注目され、資料が収集されてきた。文化相対主義と機能主義が文化人類学の理論的柱となる1920年代になると、宗教は社会的統合や心理的欲求を満たす実践として理解されることになる。1950年代以後は、宗教儀礼や神話を象徴的な実践や表象として考察する象徴分析が盛んになる。本論文では、機能主義や象徴分析といったアプローチを否定しているわけではないが、より重視されているのがイデオロギー装置としての宗教実践という視点である。本論文は、家父長主義的なジェンダー規範に関わるイデオロギーが、交霊会でのシャーマン（童乩）と依頼者とのやりとりや寺廟祭祀、家庭での祖先祭祀を通じて受容・確認され、そのイデオロギーに即した行動規範が推奨されるという過程を、ミクロな視点から明らかにしている。その際、本論文では、上記の受容・確認過程にさまざまな逸脱や抵抗を認めている。とくに交霊会でのやりとりの分析から、ジェンダー規範が受容・確認される過程を明らかにしようとする点は意欲的であり、これまでの宗教人類学の領域にジェンダーへの視点を導入した点で評価できる。

学術的には、先行研究のサーベイなどにおいて不十分な点があるが、本論文はその対象と方法において独創性に満ちたすぐれた学術論文であるという点で調査委員の意見が一致した。

以上を総合して本論文は博士（人間・環境学）の学位に値するものと判断される。また、平成27年10月30日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。